

## 【寄稿】1983年知事選挙：福岡と北海道に関する新聞記事を通じた比較

東原，正明  
福岡大学法学部：教授

<https://doi.org/10.15017/7148411>

---

出版情報：奥田八二日記研究会会報. 11, pp.330-340, 2023-09-30. 奥田八二日記研究会(九州大学大学  
文書館内)  
バージョン：  
権利関係：

【寄稿】

## 1983 年知事選挙

——福岡と北海道に関する新聞記事を通じた比較——

東原 正明

### はじめに

通っている小学校の前に選挙ポスターを貼る看板があった。そこで、初めて奥田八二の笑顔を見たことを覚えている。1983 年の春であった。もちろんその頃は、奥田がどのような人物なのか、何も知らなかった。わかっていたのは福岡県知事選挙というものがあって、それに立候補している人だということだけであった。その選挙で奥田が当選したことは、子どもながらにわかっていたはずだ。その後、横路孝弘が北海道知事に選ばれたのを知ったのは、いつのことだろうか。ただ、どちらも自由民主党が推して当選した人物ではなく、日本社会党の支援を受けていたことだけは、なんとなくわかっていた。

その後、高校を卒業して北海道で大学生活を送るようになったが、そのときにも道知事だったのは横路であった。いわば、革新系が知事を務める福岡県から同じ状態にある北海道に引っ越したのであった。政治に関心がありながらも、まだ政治学を勉強していなかった身には、革新系だということだけで素朴に親近感を覚えたものの、両知事の支持母体や選出の背景、とりわけ最初の当選時の状況などにまで思いを巡らすことはなかった。そのようなことを具体的に考えるようになったのは、大学院で政治学を専攻するようになってからのことだったように思う。

しかしその後、自身の研究関心はオーストリア現代政治、とりわけ極右政党へと向いていった。それらを研究テーマとしたため、両知事について何らかの比較を行うような作業に着手することはなかった。ただ、指導教授の紹介で北海道自治研究所の研究会に出席するなど、横路知事を支えた人々とは、部分的にとはいえ交流があった。その点で、奥田知事を生み出した福岡県との比較の視点は、少なくとも心の奥に持っていたことは間違いない。

今回、ようやく福岡県と北海道の 1983 年春の状況を比較する機会を得ることができた。自身のこれまでの研究はオーストリア現代政治に関して進めてきたが、その中で同国の地方政治にも関心を寄せ、いくつかの論文も執筆した。とはいえ、専門領域の根本的な違いから、両知事の選挙戦や残した業績などを学術論文として比較することは困難である。そのため本稿では、1983 年の 2 つの知事選を全国紙がどのように比較しながら報じたのか、『朝日新聞』を中心としつつ、それとは対照的な論調である『読売新聞』の記事を補足的に参照し

ながら検討したい。それによって、直接的ではないものの、社共共闘が実現した福岡と両党がともに候補者を立てることになった北海道の状況の違いが見えてくるかもしれない。そして、1983 年春の両革新知事の当選が東京の視点からはどのように見られていたのか、わずかばかりでも明らかになればと考えている。

## 1. 選挙前の情勢はどう報じられたか

選挙前の情勢について、まず 1983 年の『朝日新聞』から確認してみよう。投票まで 2 ヶ月に迫った 2 月、福岡と北海道の両知事選挙は「予断許さぬ厳しい攻防」とのタイトルで報じられていた。この記事では、福岡と北海道の両知事選について、当初の状況を次のように整理している<sup>1</sup>。

まず福岡については、自由民主党などが推す亀井光知事が「豪華、公私混同の知事公舎問題でつまず」き、「防戦」を迫られているのに対して、日本社会党、日本共産党などによる「清潔な県民本位の県政をつくる会」が九州大学教授であった奥田の「担ぎ出しに成功」し、「追い上げている」と伝えた。選挙戦の特徴としては、奥田陣営が「革新」という言葉の使用を控えたのに対して、亀井陣営は「保守か、革新か」の選択を迫る戦術をとっている点が挙げられた。

一方、北海道に関しては、自民党に加えて公明党や社会民主連合など「中道四党」に推薦された三上顕一郎、社会党推薦の横路に加え、共産党推薦の広谷陸男が立候補を予定していたが、事実上は三上と横路の対決であった。記事によれば、町村金五、堂垣内尚弘と続いた「官僚道政の後継者」である三上は、「道庁組織から市町村までを一体化した「道庁マシン」と呼ばれる集票機構をフルに動かして」、「団体、業界ぐるみの選挙を展開」していたのであった。それに対して横路は、社会党の元衆議院議員であった父節雄の代からの「幅広い知名度を武器に、「静かなる改革」を掲げて都市型ムード選挙を繰り広げ」た。そして、「徹底して革新色を抑え・・・道民党」を名乗るなど、浮動層に照準を合わせた作戦」をとり、「横路と勝手に連帯する若者連合」(勝手連)などの市民運動に浸透しているとされた。それは、三上が「中央とのパイプ」を強調したのに対して、横路は「中央依存型経済構造からの脱却を目指す」という対立構造でもあった。

ただし『朝日新聞』によれば、1983 年の 13 都道府県の知事選は、「保守・中道連合」「保守相乗り」の共闘パターンが一段と定着してきたことが特徴であった。むしろ、「社共共闘は東京、福岡だけ」となり、「北海道は「社」「共」が 20 年ぶりに別れ」る結果となっ

---

<sup>1</sup> 『朝日新聞』1983 年 2 月 15 日朝刊。

た<sup>2</sup>。このような、全国的に見れば例外的な状況の中で、福岡では政治倫理や腐敗が問題視され、奥田陣営が「まるで田中角栄を相手にしているようだ」と語ったのは、福岡県政の置かれた状況をよく表していよう。一方北海道では、横路の応援に立った評論家の立花隆が、当時、中曽根康弘首相が発して問題となった「不沈空母」や「夜警国家」といった言葉を使いながら日本政府を批判し、「国政に占める北海道知事の意義を強調し」て平和を追求する姿勢を明確に示した<sup>3</sup>。

また、知事選の選挙戦序盤については、福岡と北海道で異なる情勢が報じられていた。福岡では、奥田と亀井が「全く互角の戦いとなっている」のに対して、北海道では三上が「一歩リード」し、横路が「激しく追い上げる」展開であると分析された。のちに二人の革新系知事が誕生することになるが、選挙序盤は横路がやや劣勢と報じられていたのであった。とはいえ、奥田と横路の状況には共通点もあった。前者が「大票田の福岡市で、亀井を上回る勢いとなっているのが目立」っていたのと同様に、「札幌市とその周辺や、空知地方の炭鉱地帯で横路がリードを広げてい」た。また、男女別でも、両者とも女性において互角であったほか、若年層ではともに対立候補に対して優位であった。そして、奥田は「組織労働者を中心に事務、管理職層で優位に立って」おり、横路も「サラリーマンを中心とした事務職・管理職、産業労働者層の支持」を得ていた<sup>4</sup>。

その後、終盤の情勢にはやや変化が見られた。福岡では、亀井が福岡市内でも「序盤の劣勢を盛り返している」と評価された。奥田は「支持基盤の社会、共産支持層を着実にまとめ」たものの「革新支持層の広がり薄いのが弱み」と指摘された。北海道でも、札幌市内で三上が「横路と並ぶ勢い」であるものの、同市内で横路が無党派層に「支持を大きく広げれば逆転の可能性もある」との分析であった。こうして、福岡、北海道とも保守系候補が優勢であると報じられるに至ったのだ<sup>5</sup>。

<sup>2</sup> 『朝日新聞』1983年3月16日夕刊。1983年の知事選について、社共共闘が実現した福岡県と両党が対決する形となった北海道での状況について『読売新聞』は「ねじれ」と表現し、「今回一段と鮮明になったことも特徴の一つ」と指摘した。社共両党の関係は、「(昭和)55年1月に社会党が共産党を排除した社公政権構想合意を公明党との間で結んだ時点から陰悪になっている」とし、「両党のしこりはいぜん根深い」と述べている。社共両党が都道府県ごとにそれぞれ異なった対応をしていることから、それぞれの共闘や対決の結果がどのように出るかによって「今後の社共関係の帰すうが定まってくる」と同紙は分析した。『読売新聞』1983年3月16日夕刊。

<sup>3</sup> 『朝日新聞』1983年3月16日夕刊。さらに立花は、「勝手連は民主主義の全く新しい選挙形態だ」と積極的に評価した。『朝日新聞』1983年4月11日夕刊。

<sup>4</sup> 『朝日新聞』1983年3月21日朝刊。

<sup>5</sup> 『朝日新聞』1983年4月7日朝刊。

選挙戦最終盤の両陣営の舌戦の激しさについて、投票前日の『朝日新聞』は次のように伝えている。福岡では亀井の陣営が「アカ攻撃」をエスカレートさせ、立ち会い演説会で奥田が登壇

一方、選挙情勢を報じた 4 月 5 日付『読売新聞』では、福岡について、福岡市内と郡部で亀井が、北九州では奥田がリードしていると伝えた。それに対して、北海道についてはやや詳しく伝えている。地域的には道南と道東で三上がリードし、横路は札幌圏や道央でリードしているとされた。そして、世代別では二十代、三十代で横路が、四十代以上では三上が支持を集め、世代によって違いが見られた。さらに職業別での支持傾向も報じられている。三上支持が多いのは農林・水産業、商工業、管理職などであり、横路への支持は自由業、事務・技術職、労務・サービス職で優勢であった<sup>6</sup>。

同紙は投票直前の金曜日には、自民党が手応えをつかんでいると報じた。福岡では亀井が「懸命な巻き返しで、「互角に持込み」、同党は、最後は逃げ切れると判断したという。北海道でも、三上が「微差でリードを保ち、「最終的にいけそう」と考えていることが伝えられた。社会党については、横路が「あと一歩」であってテコ入れを凶っているとされるのに対して、福岡の情勢を党選挙対策本部が「カギは浮動票、特に女性票」と考えており、「詰めを誤らなければ勝てる」と判断しているとのことであった<sup>7</sup>。

## 2. 選挙結果はどのように報じられたか

1983 年 4 月 11 日、投票翌日の『朝日新聞』朝刊は、一面に大きく「福岡は革新・奥田氏」との見出しを掲げ、さらに「中曽根政権に痛打」と打ち出した。福岡と北海道の即日開票分が反映されたこの紙面では、奥田の当選を報じたものの、北海道については「横路氏急

すると、社会党と共産党に推薦されていることを念頭に「ソ連へ帰れ」「マルクス主義者」のやじが絶えなかった」という。奥田も、亀井の「多選のおごりに集中砲火」を浴びせた。亀井陣営からは「アカ攻撃」、奥田陣営からは亀井の腐敗ぶりを批判するビラがまかれたほか、「出所不明のビラも飛び交い」、「政策論争そっちのけのビラ合戦、ロコミ戦のどぎつさもピークに達した」と報じられた。

また北海道では、まず三上の陣営の選挙戦について、「道庁から民間会社に天下った幹部 OB をズラリと選対に配し、四千を超える道庁関連団体、企業を総動員。オホーツク沿岸の町で現役道幹部が票のとりまとめを依頼した録音テープが暴露されるなど、巨大な集票機構「道庁マシン」の呼び名がすっかり定着するほどの徹底した保守型組織選挙を展開してきた」と総括されている。横路陣営では、「全道で旗揚げした数十の勝手連のゲリラ戦」が展開されたという。「札幌市の保守の牙城と見られた歓楽街ススキノで「ススキノ勝手連」が千人以上を集めてまとまったほか、「学生勝手連」は応援演説に訪れた中曽根首相に直接抵抗する幟を掲げ、さらに若者の勝手連が『聖教新聞』に大きな出版広告を掲載させた。さらに、「中央省庁の若手役人や研究者ら 40 人の「霞が関勝手連」が活動するなど、道庁「マシンが手を焼いた」と報道された。『朝日新聞』1983 年 4 月 9 日朝刊。

<sup>6</sup> 『読売新聞』1983 年 4 月 5 日朝刊。

<sup>7</sup> 『読売新聞』1983 年 4 月 8 日朝刊。

追」と表現され、三上と「激しい競り合いを演じた」と記すにとどめられて、当落までは踏み込まれなかった<sup>8</sup>。

とはいえ、奥田の勝利に関して、すでに『朝日新聞』はその後の県政運営への懸念も示していた。亀井による公私混同とも批判された知事公舎の問題をとらえ、奥田陣営は「清潔か否か」を訴えて当選した。この勝利を同紙は、「従来の保革対決の枠を超えた選挙戦」の結果であったとした。同時に、亀井の前任であった社会党知事時代に「県政には労組が深く介入し、組合側のおごり、公私混同ぶりに県民の批判が集まった」ことを念頭に、「それだけに、今回の奥田支持票は「奥田県政」の進め方が一つ間違えば、いつでも離れていくものともいえるだろう」「奥田県政の行方は容易ではなさそうだ」と指摘した<sup>9</sup>。この点について奥田は十分に理解していた。出馬に際して彼は、「政党、労組にしばられては勝てないし、県政運営もおぼつかない。選挙態勢は『県民党』的なものに」との条件を出した」という。それに対して政党なども、「福岡県の革新運動をよく知っている人の言葉だけに陣営も受け入れざるを得なかった。社共、県評は「県民の会」の一員にしか過ぎ」なかったのであった。こうして、奥田らによる「脱「政党・労組色」」は徹底され、結果に結びついたと言えよう<sup>10</sup>。

加えて、『読売新聞』は知事公舎の問題が保守層の離反にまでつながった点を強調している。奥田が勝利した背景として「知事公舎問題など 16 年間の亀井県政のゆるみや、汚職事件が相次いだことが、国の農政に不満を持つ農民層の保守離れ意識の引き金になったとも言え、それが亀井批判票として一気に噴き出した」と<sup>11</sup>。

一方、北海道知事選挙については、『朝日新聞』同日夕刊が結果を報じ、横路の当選が伝えられた。その理由として同紙は、「石炭産業や紙・パルプなどの素材産業が低迷、漁業は 200 海里規制で落ち込み、農業も稲作、牛乳の生産調整を強いられている。北海道開発庁が臨調答申で統合の対象にされるなど、閉塞状況になっていることの反映」「海峡封鎖発言など防衛問題での首相の積極姿勢が、最前線に立たされた北海道民の不安感をかき立てた」と指摘した。横路の選挙戦は、「知性派論客として鳴らした」衆議院議員時代とは異なって、「「知」をかなぐり捨て、徹底して道民の「情」に訴えかけた」ものであったと評された。すなわち、「ひたすら「道産子四代目」として北海道への思いを語り、石炭やコメが切り捨てられつつある北海道の自立と、開拓者魂の復活に声をからした」のであった<sup>12</sup>。

<sup>8</sup> 『朝日新聞』1983 年 4 月 11 日朝刊。

<sup>9</sup> 同上。

<sup>10</sup> 同上。

<sup>11</sup> 『読売新聞』1983 年 4 月 11 日朝刊。

<sup>12</sup> 『朝日新聞』1983 年 4 月 11 日夕刊。この北海道の状況について同紙は、「道民の閉そく感は極限に近づいていた」と分析し、三上を擁立した「保守・中道連合が、完べきな体制を整えたに

『読売新聞』は、すでに 4 月 11 日付朝刊で横路を当選確実であると判断したが、彼の当選の要因を「父子二代にわたる代議士としての高い知名度と、従来の選挙にはみられなかった大胆な戦略を構築、保守、中道層にまで食い込んだこと」に見出した。横路は、堂垣内知事が掲げてきたスローガンである「道民党」を拝借する一方、原発の建設についても、明確な反対の立場をとらないなど「これがかつての社会党代議士か」と思わせるほどの柔軟な政治姿勢で選挙戦を戦った。また、選挙運動の面では、勝手連などが中心となって「革新主導型選挙から脱皮」し、「徹底したソフト作戦と、横路氏の持つタレント的キャラクターが、相乗効果を発揮」したと分析した。さらに、道民の意識の変化も勝因として挙げられている。北海道が抱える不況や農業など、すでに述べた諸問題が存在する中で、「かつては革新王国といわれた政治風土が、新しい政治の流れを求め、横路氏のいう「静かなる道政改革」を受け入れた」と総括した<sup>13</sup>。

この両者の選挙戦を整理するように、『朝日新聞』の論説委員兼編集委員であった広瀬道貞は、奥田と横路がともに、「中央政治の左右の争いとは一線を画そうとする構え」であったことを指摘している。「奥田氏は「政党、労組にしばられない」と条件をつけ、横路も「自治労に対し「自分が知事になってもベアがうまくいくと期待してくれるな」と念を押した」という両者の態度を紹介し、イデオロギー色を前面に出さない戦略をとったことを特徴であると<sup>14</sup>。

また、『読売新聞』の政治部長である加藤弘久は、福岡と北海道で革新勢力が「地方政権を奪還した意義は小さくない」「保守を中心とした相乗り選挙に安住しようとするかにみえる自民党に痛撃を与えた」と指摘した。とは言うものの彼は、選挙戦で対抗勢力が中曽根首相の進める政策への反対を訴えたにも関わらず保守・中道連合が勝利した東京などの例を挙げ、地方政治の環境が「保守回帰、あるいは保守・中道連合の流れに対し、革新の巻き返しが逆流となり始めた、と切りきれない面もある」とも述べている。すなわち「知事選は、あくまで地方首長の選択、あるいは審判であり、国政の動向と直結するとは言えない」と、革新勢力の伸長の意義を矮小化するような主張を展開した<sup>15</sup>。

もかかわらず敗れたことは、「流れを変えたい」との有権者の意識が予想以上に広がっていたことを示している」と判断した。そして、道内の有権者が抱える「不満が、「保革を超えて政治力を結集し、現状打破を」と訴える横路氏の主張に急速に共鳴していた」と評したのであった。

<sup>13</sup> 『読売新聞』1983年4月11日朝刊。

<sup>14</sup> この点は、広瀬によれば1980年代の地方政治の「体質と輪郭」の第二の点である。彼は、この時代の地方政治を「「知事の時代」の到来」と規定し、第一の点として「右手で与野党勢力の拮抗を利用し、左手でときに「大臣以上」といわれる強力な権力を利用」する知事の姿を挙げた。『朝日新聞』1983年4月11日夕刊。

<sup>15</sup> 『読売新聞』1983年4月11日夕刊。

さらに、同紙の解説部長である外山四郎は、福岡と北海道での革新側の勝利をもたらしたのは、「権力を持つ側のおごりと、それを見抜き反発した有権者の確かな政治意識ではなかったか」と、保守陣営の側の問題を強調している。しかしその指摘は、福岡における知事公舎の問題等のみに向けられたものではなかった。彼はむしろ、北海道の方が「構造的なおごりの印象は、実は福岡よりはるかに強かったのではなかったか」と、道内の保守陣営の責任に注目している。道庁マシンと呼ばれる集票組織を念頭に、即日開票で農村票が十分伸びなかったことについて、横路と対決した「三上陣営の幹部は「町村長は何をやっていたのか」とハラを立てていたという。この一言にすべてが表れている。有権者の意識より集票マシンを過信したこと自体、つまりは権力のおごりそのものだったのではないかと批判したのであった<sup>16</sup>。

### 3. 革新知事の就任と選挙の影響

1983年4月12日の『朝日新聞』は、奥田、横路の両新知事に加え、長洲一二神奈川県知事との間で電話会談を行い、その様子を紙上座談会の形で再現している。そこでは奥田、横路がともに、無党派やボランティアの人々から受けた支援の大きさを強調した。また、県政、道政運営に関しては、保革の区別なく様々な勢力と協調していく姿勢を打ち出した。例えば奥田は、「対話」「政治参加」「情報公開」を柱に、みんなで政治を考える空気をつくりたい。でなければ、地方自治、とりわけ革新自治体の政治は進まんと思う」と強調した。『朝日新聞』は選挙戦について三つの視点から振り返っている。第一の点は、奥田、横路の両者とも、革新勢力が県政、道政を奪回するとは主張しなかったことである。奥田は過去の革新福岡県政を批判し、亀井陣営からの攻撃をかわした。また、横路も「新開拓時代」というキャッチフレーズを打ち出して保革の色分けを避けたという。第二に、両者が県民党、道民党を名乗ったことであった。そして第三に、両者が「脱・組織型」の選挙戦を展開したことであった。これらの戦略によって彼らが「広く無党派層に浸透」したのであって、それを同紙は「新たな革新」と呼んだのであった。奥田は対談記事の中で、「いまの世の中、政党とか労組だけでは、選挙に勝てなくなっている」とし、その理由として、「組織自体が一般住民から離れた存在になっている」ことを指摘した<sup>17</sup>。

さらに『朝日新聞』は、4月20日付紙面にて、「革新知事 さあ就任」との表題で福岡と北海道の状況を整理している。北海道については、道庁内部の動揺が第一に報じられた。部

<sup>16</sup> 『読売新聞』1983年4月12日朝刊。さらに同紙は、「激戦の知事選で革新の二氏を押し上げたのは、主婦パワーだった」として、南北の選挙で大きな力を発揮したのが女性たちであったと指摘している。

<sup>17</sup> 『朝日新聞』1983年4月12日朝刊。



長会では、前副知事である三上が横路に敗れたことから、「一心同体となってやった前副知事が敗れた以上、われわれも辞めるべきだ」といった殉死論も出されたという。このように、道庁幹部からは強い警戒感が示されたが、横路にとってみれば、道議会も少数与党体制となることが明らかであった。同時に、横路がメーデーへの出席を表明したことから、総評と同盟に分裂しているメーデーに対して、「道民党」を標榜して当選した同氏がどう対応するかにも焦点が当てられた。また、社会党道本部や全北海道労働組合協議会（全道労協）には、勝手連が横路の当選に大きな力を果たしたことへの配慮が見られた。社会党道本部委員長の川村清一は、「道民党として遠慮なく仕事をしてほしい。労組や党の幹部が知事室に足を踏み入れてはいかん」と自戒を込めて語ったという。

それに対して、福岡の状況についてこの記事では、亀井が建設した知事公舎の豪華さとの関連で奥田の動向に焦点が絞られていた。一方、北海道の記事にあるような県庁内の体制転換に関する不安は報じられていない。むしろ、当時置かれた奥田の立場について重要なのは、この記事にある以下の部分であろう。

「奥田さんが実際に当選してみると、やったという気分には、とてなれませんが。奥田さん、それに革新陣営のみなさん。これからの県政運営に当たって、革新が保守に勝ったという認識は持たないで下さい。亀井さんのおごりがいやで、あなたに一票を入れた私のような有権者が、たくさんいることを忘れないで下さい」(久留米市・主婦)

この一週間、新聞の投書や声の欄に、こうした奥田支持者の声が目立つようになった。16年ぶりに新知事を迎える県民の、最大公約数的な思いであろう。」

こうして、北海道に関する記事とは異なって、奥田をめぐっては前知事が残し、批判の的となった知事公舎をどうするのか、そのような批判票をまとめることに成功した奥田陣営の今後の対応に、釘を刺すような内容となったのであった<sup>18</sup>。

同時に、両知事選の結果がいかに関政に影響を与えるのかについても論じられた。すでに選挙約一カ月前の 3 月半ばの段階で自民党の二階堂進幹事長は、福岡と北海道での知事選挙の「帰すうは、中曽根内閣に対する国民の審判と受け止め、「統一地方選に続く参院選、衆院選に大きく影響する」との考えを示していた。社会党の角屋堅次郎選対委員長も、「'83 政治決戦に弾みがつくかどうかの戦略拠点」として重視し、飛鳥田一雄委員長も「ストップ・ザ・ナカソネ」を真正面に据え、「反動阻止、反軍拡、反核」を訴え<sup>19</sup>。自民党田中

<sup>18</sup> 『朝日新聞』1983 年 4 月 20 日夕刊。

<sup>19</sup> 『読売新聞』1983 年 3 月 16 日朝刊。自民党「田中派などの基本戦略」は「北海道、福岡で勝ち、余勢を駆って 6 月のダブル選挙へ」ということであったという。『読売新聞』1983 年 4 月 7 日朝刊。

派を中心とする党執行部は、「保革ががっぷり四つに組んだ北海道、福岡両知事選を”天王山”とまで言い切り、ここでの勝敗が「衆参同日選挙」是非を決めるカギになる、とまで言っていた」のであった。選挙後も、福岡でも北海道でも、別の候補者を立てていたら勝つことができていたはずだ、との反省の声が聞かれた。『読売新聞』は、それを事実かもしれないが、としつつも、「選挙技術論に終始した政権党のおごりがちらついている点は否めない」と批判的に指摘した<sup>20</sup>。

この統一地方選挙は中曽根政権成立後初の大型選挙であった。しかも、夏に参議院選挙が予定されていたことから、上記のように自民党は「中曽根政治の評価が出る」として、力を入れてきた。4月11日の『朝日新聞』では、野党からの批判が強まるのみならず、「党内主流派からも中曽根政治のあり方への不満と反発が強まりかねない」ことから、二階堂幹事長は選挙結果が「今後の政治の流れに響く」と危惧していることが報じられた<sup>21</sup>。さらに、同日夕刊では、自民党内に「両知事選敗北の背景に、中曽根首相のタカ派的体質や、政治倫理問題への消極姿勢に対する反発があったとの見方」が出ているとして、政策面に加えて田中角栄元首相にまつわる政治倫理問題への取り組みが消極的なことなどが問われていると伝えられた。だが、二階堂幹事長は衆参同日選挙を行うか否かを明言することはなかった。一方で、社会党の飛鳥田委員長は「衆院解散に追い込む」と声を上げ、公明党からも中曽根内閣を追い込む姿勢が示された。さらに、新自由クラブや社会民主連合による中曽根内閣批判も確認されたのであった<sup>22</sup>。こうして福岡と北海道の知事選の結果は、単なる地方選挙という枠組みを超えて国政与党である自民党へ大きな影響を与えた。また、国政野党にとっても、自民党政権との対峙の仕方について道筋を与えたともいえよう。

## おわりに

横路が北海道知事として、道内に様々な課題を抱えつつもスタートを切ったのに対して、奥田は「清潔な県政」を目指しながらも、自身の周囲で起こった選挙違反に悩まされる中で知事就任となった。その後の両道県政の展開については本稿の検討対象ではなく、別に譲らなければならない。しかしながら、両者ともに3期12年間、知事の職を継続することになった。1920年生まれであった奥田は2001年に亡くなったが、1941年生まれで知事退任後も衆議院議員、衆議院議長を務めた横路は、議員引退後の2023年に逝去した。

両者の選挙戦について共通点を挙げるとすれば、「県民党」「道民党」を名乗り、保革対決というイメージを抑えたことであろう。一方で報道の面では、奥田について、その清潔さに

<sup>20</sup> 『読売新聞』1983年4月12日朝刊。

<sup>21</sup> 『朝日新聞』1983年4月11日朝刊。

<sup>22</sup> 『朝日新聞』1983年4月11日夕刊。

注目して伝えられてきたのに対して、横路の場合には中曽根政権のタカ派的な要素、北海道の置かれた厳しい状況への批判が指摘された。さらに、両者の違いをあえて指摘することを許されるだろうか。奥田は、研究者として革新陣営に与しながらも、県知事選立候補までは学者の立場を維持していた。それに対して横路は、父の後を継いで社会党衆議院議員を務め、その後に北海道知事へ転じた。あくまでも表面的なことに過ぎないかもしれないが、この両者の知事としてのスタート地点の違いに、社共共闘を完成させた奥田の位置と、政党人として社会党単独で立候補した横路の違いを見出すことができるのかもしれない。とはいえ、北海道では社共共闘が決裂して 20 年ぶりに共産党が独自候補を立てたことをふまえれば<sup>23</sup>、福岡と北海道における社会党のイデオロギー的な位置関係の違いなど、検討すべきことは多い。

ところで、ここで、これまでの保守対革新という日本的な表現を改めて、右派對左派によって表現されるヨーロッパの対立関係で捉え直してみよう。ヨーロッパ、とりわけドイツ語圏のドイツとオーストリアの戦後の内政に目を転じてみれば、国際的に日本社会党と交流を持ってきた左派政党である両国の社会民主党には、連邦政府を担う時期が長くあった。その点は、社会党の国政参加が一時期にとどまった日本の場合と決定的に異なるが、そこには、両国との政治文化の違いや比例代表制を基本とした選挙制度の効果など、様々な相違点を指摘できる。

さらに言えることは、連邦国家である両国では、地方政治で経験を積んだ政党が連邦政府に参加するケースが見られることである。日本の南北で左派系知事が誕生したのと同時期である 1980 年代半ばに国政選挙で議席を得た緑の党は、いくつかの州政府で政権参加し、やがて連邦政府に参加する機会を得た。ドイツでは、社会民主党 (SPD) と連立したドイツのシュレーダー政権 (1998 年～2005 年) や現在のショルツ政権 (2021 年～) がその例である。また、オーストリアでも現在、右派の国民党 (ÖVP) との連立で緑の党が政権入りしている (2020 年～)。連邦制下では、州ごとに政党のイデオロギー的傾向が異なることから、緑の党を単純に左派政党であると規定することはできないが<sup>24</sup>、地方政治で足場を築いた (左派) 政党が連邦レベルでの政権参加に成功した例として挙げるができる。

<sup>23</sup> 『読売新聞』1983 年 3 月 16 日夕刊。

<sup>24</sup> オーストリア緑の党が、右派政党である国民党と連邦レベルで連立を組んでいる事実は非常に興味深い。同党の形成過程で農民などによる保守的な環境保護運動が重要なルーツの一つとなっていることに関して、簡潔に記述している著作としては、例えば Othmar Pruckner, *Eine kurze Geschichte der Grünen*. Wien, 2005 などを参照。また、この点については、東原正明「1978 年国民投票と脱原発 —オーストリアの選択—」(『福岡大学法学論叢』第 64 巻第 4 号、2020 年 3 月) でも触れている。

制度や政党間関係、選挙制度等の重要な要素が異なり、しかも連立政権が常態化しているこれらの連邦国家と、中央集権的な傾向が強く、自民党の一党優位体制が続いてきた日本を単純に比較することはできない。しかし、地方政治において経験を積み、国政を担うべく実績を上げていくことは、政権担当能力を示す上で大きな意味を持つものであったはずである。その意味で、福岡と北海道で知事の地位を占めた日本のかつての左派勢力の経験は、決して軽視されるものではない。しかし、彼らはその経験をどの程度国政に反映させることができたのだろうか。社会党が解体し、国政野党内部に多くの保守政治家を抱える現状は、1955 年体制下での保守対革新（右派對左派）という対立関係が大きく変化したものにとらえざるを得ない。それを、日本の政治や世論の右傾化という言葉で括ってしまうてよいのだろうか。むしろ、そもそも左派陣営内部にも、保守的な価値観や行動様式が内包されていたとは考えられないか。福岡や北海道で地方政権を担った事実が現在にどのような示唆を与えるのかは、今なお十分に検討の余地があろう。